

マンチェスターの年末

保明綾

マン彻スター大学

School of Arts, Languages and Cultures

マン彻スターに住むようになってはや 15 年以上の月日が経ちました。留学当初は、100 年以上前のロンドンで夏目漱石が感じたように重圧的な灰色雲に気が滅入っていましたが、ようやく最近になってイギリス独特の冬の到来にも慣れてきた感が募ります。今回は、マン彻スターの年末の様相を報告して欲しい、とのご依頼がありましたので、街の年末の様子を、現在私が所属するマン彻スター大学日本研究学における年末の描写も兼ねつつ、ご紹介します。

マン彻スターの冬の到来を告げるのは、やはり、いまは恒例となった市街地でのドイツ風クリスマス・マーケットだと思います。開催当初（もう 10 年以上にもなるかと思います）は、市庁舎のある Albert Square でのみ開催されていましたが、近年は St. Anne's Square など市街地各地で広範囲に亘ってひらかれています。また、当初は 11 月後半に始まったクリスマス・マーケットも最近では大体 11 月の第 2 週末に始まる場合が多く、今年も Manchester Evening New 紙が 11 月 14 日にマーケットが開かれたことを報じました。¹

Evening 紙が、「既に人々はグリューワイン〔の入ったカップ〕を手で囲んで」暖をとっている、と報じた通り、多くの人々にとってクリスマス・マーケットを訪れる目的は、寒い中、ドイツのグリューワインやビールを飲み、これまたドイツから直輸入の巨大ソーセージを頬張り、市庁舎の建物の屋上にでん、と構えた巨大サンタを鑑賞しながらの友人・家族との歓談だといえます。私や私の同僚も、親睦を深めるために例年担当の学生をクリスマス・マーケットに連れていきますが、今年のある学生は、ベルリンのファース

¹ <http://www.manchestereveningnews.co.uk/whats-on/whats-on-news/open-manchester-christmas-markets-2014-8105838>

ト・フードの、カレー粉をソーセージにかけたカリーヴォーストとグリューワインを手にしながらお喋りに興じていました。クリスマス・マーケットは他にもヨーロッパ各地の料理や特産品も手に入れることができますし、またクリスマス・プレゼントにうってつけの手作りの工芸品を売る出店も並んではいるのですが、やはり主役はドイツのグリューワインとソーセージのようです。吐く息が白くても、みぞれが降っても構いません。寒いだの、濡れるなど愚痴を言いながらもグリューワインを飲み、ソーセージをかじるのがマンチェスター・クリスマス・マーケットの真髄です。

さて、街ではきらびやかなクリスマスのイルミネーションが通りを飾り、一年で最大のイベントのクリスマスに町中が浮かれている中、わが日本研究では学期の終盤にかかり、学生はラストスパートで課題をこなしています。皆さんもご存知の通り、イギリスでの大学の成績は就職活動に影響するので、学生も必死になって勉強しています。

しかし、そうは言ってもイギリス。いつまでもダラダラと勉強はせず、折り目をつけて、遊ぶところは遊びます。というわけで、日本研究学でも 12 月 5 日の金曜日、週末が始まる午後 5 時から学内でクリスマス・パーティーを開催しました（ちなみに、このパーティーへは、日本からの交換留学生などにも参加を促しています。しかし、私たち教員が手助けしなくとも、学生同士がソーシャル・ネットワークを駆使して交流を図っているようです）。一応コスチューム・パーティーと名打ったこのイベントに、何人かの学生は力を入れてポケモンのキャラクターのコスチュームや日本のパンクロックのコスチュームなどで登場してくれました。学生どうしや学生と教員との親睦が主な目的ですが、日本研究ですので、そこはカラオケ大会を通じて、ということになります。去年日本の留学を終え帰ってきた 4 年生の学生は最近流行りの歌を熱唱し、みごと高いスコアを出してくれました。

パーティー後一週間が経った 12 月 12 日には、マンチェスター大学では今学期最後の授業が終わり大学はひっそりとしている中、翻って市街地はクリスマス前最後の商戦もあってさらに賑わいを増しています。翌週 19 日には小高校も冬休みに入り、街を歩く人々も既に休暇に入っている大人や家族連れなど様子が変わってきて、わくわくしたお祭り気分で充満されているよう

です。留学当初は、暗く寒いこの時期が苦手だった私も、ようやく今になってこの時期のお祭り気分を受け入れている自分がいます。